

では、米ぬか多糖体 (RBS) は、ガンに対してどのような働きをするのでしょうか。それを調べた動物実験があります。ラットの体にガン細胞を植えつけて、米ぬか多糖体 (RBS) を毎日投与した群と、投与しない群とで腫瘍の大きさを比較しました。

すると、米ぬか多糖体 (RBS) を投与した群のほうが、腫瘍の増殖が遅くなることわかったのです。17日目から腫瘍の大きさに差が付き、35日目の

また、米ぬか多糖体 (RBS) は、ガン患者のQOL (生活の質) の改善にも寄与することが確認されています。ガンの治療では、QOLの低下も大きな問題です。QOLが低下すると、気持ち落ち込み、治療にも悪影響を及ぼすからです。

この研究では、肺ガン、肝ガン、子宮ガン、乳ガンなど2005人のガン患者さんに対し、通常治療に加えて米ぬか多糖体

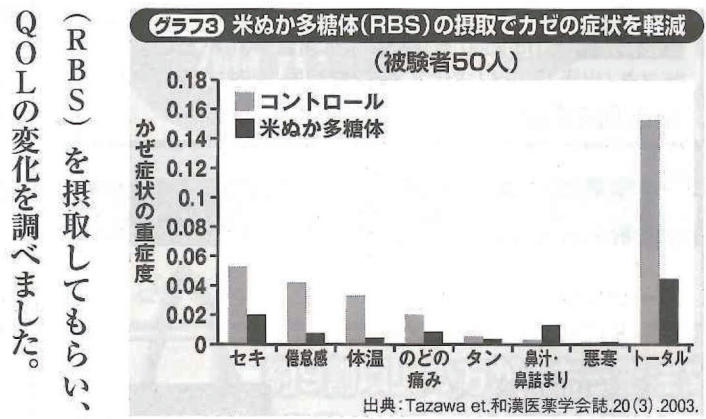
腫瘍の大きさを比較すると、米ぬか多糖体 (RBS) を投与した群の腫瘍は、増殖が60%以上抑えられていることが確認されました。

腫瘍は増殖し、大きくなることで生体に悪影響を及ぼします。本研究から、米ぬか多糖体 (RBS) は腫瘍が大きくなるのを抑制し、その広がりを防ぐ作用が期待されます。

ガン患者のQOLスコアがすべての項目で改善

「痛み」「疲労感」「吐き気」「食欲」などのすべての項目で、QOLのスコアが改善することが示されました。とりわけ、「食欲の増加」は顕著でした (グラフ2)。

ガン患者さんは、さまざまなつらい症状があることで、気持ち落ち込みがちになります。痛みや疲労感、吐き気が減少し、食欲が増加すれば、前向



(RBS) を摂取してもらい、QOLの変化を調べました。18ヵ月にわたる観察の結果、

大きな気持ちで治療に取り組めるようになるかもしれません。

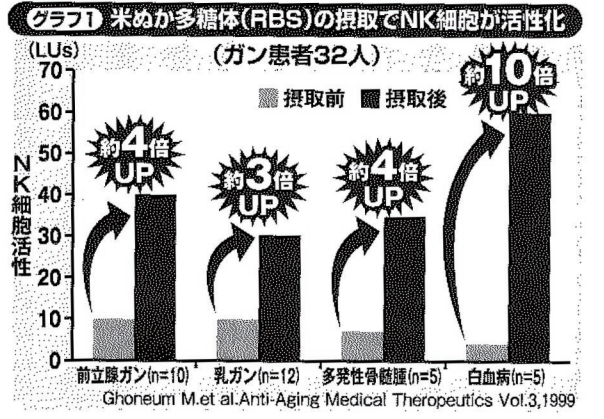
このほか、米ぬか多糖体 (RBS) はカゼの症状の軽減にも役立つことが実証されています。介護老人施設の高齢の入所者50名を対象として、米ぬか多糖体 (RBS) を摂取した群と摂取していない群を比較したところ、セキ、倦怠感、熱、のどの痛みなどの症状が緩和されることが明らかになりました (グラフ3)。

米ぬか多糖体 (RBS) がウイルスなどによる炎症を抑制し、カゼの症状を軽減させたと考えられます。

米ぬか多糖体 (RBS) は、さまざまな安全性試験をクリアしている食品です。これまで、重い副作用事象が報告されたことはありません。ただし、自己免疫疾患など特殊な状況を抱えている場合は、少量ずつから摂取し、様子を見ながら必要量を調整することが必要でしょう。

免疫は、体外から侵入したウイルスや細菌を退治したり、体内で発生したガン細胞を攻撃したりする、健康に欠かせない生

体防御システムです。米ぬか多糖体 (RBS) には、免疫細胞を活性化したり、逆に過剰反応 (アレルギーなど) を引き起こす免疫細胞を抑えたりする、「免疫調整作用」があるのです。



米ぬか多糖体 (RBS) が免疫に及ぼす影響を調べるために、ガン患者さんに米ぬか多糖体 (RBS) を1〜2週間摂取してもらい、摂取前後のNK細胞 (ナチュラルキラー細胞) の活性を測定した研究があります。

NK細胞は免疫細胞の一種で、血流の滞りが体内をめぐり、ガン細胞のような自分と同じではない異物を見つけて、攻撃する働きを持っています。

そのNK細胞の活性が、米ぬか多糖体 (RBS) を摂取したあとでは、有意に上昇していることが明らかになったのです (グラフ1)。

この研究の対象となったの

は、前立腺ガン (10人)、乳ガン (12人)、多発性骨髄腫 (5人)、白血病 (5人) の患者さんたちです。米ぬか多糖体 (RBS) を摂取することで、前立腺ガンの患者さんのNK細胞活性は、約4倍に上昇しました。乳ガンの患者さんでは、約3倍に上昇。多発性骨髄腫の患者さんでは約4倍に上昇し、白血病患者さんでは約10倍も上昇していました。いずれのガン患者さんでも、NK細胞の活性が大幅に向上していたのです。本研究では、4種のガンが対象ですが、今後は、ほかのガンに与える影響も明らかにされることが期待されています。

ガン細胞の増殖を抑えると実験で確認

古くから日本人の食と健康を支えてきた、米。最近では、米のぬかから抽出した「米ぬか多糖体 (RBS)」という成分が注目されています。東京大学、千葉大学、名古屋大学など、国内外の28以上の大学や病院などでさまざまな研究が行われ、免疫を強化・調整する米ぬか多糖体 (RBS) の働きが、明らかになったからです。

「米ぬか多糖体 (RBS)」

ガン患者対象の臨床試験で免疫細胞の活性化とQOLの向上が判明した

